

141 イエスを殺す計画

ヨハネによる福音書 11：45～57

45 マリアのところに来て、イエスのなさったこと（→ファイル No.139,140 ラザロの復活＝ヨハネ 11：38～44）を目撃したユダヤ人の多くは、イエスを（メシアであると）信じた。

46 しかし、（ファリサイ派の手先であるユダヤ人の）中には、ファリサイ派の人々のもとへ行き、（メシア的奇跡を目撃しながらも、邪悪な心、反抗心、不信仰な心からか）イエスのなさったことを（悪く）告げ（イエスを陥れようとす）る者もいた。

47 そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院（→サンヘドリン）を（急遽）召集して言った。
「この男は多くのしるし（→ギリシア語「セメイオン」：奇跡）を行っているが、どうすればよいか。
→（回復訳）われわれは何をしているのか？あの者が多くのしるしを行なっているというのに。
→（リビング・バイブル）あの男が奇跡を行っているというのに、いったい何をぐずぐずしているのか。
→（新改訳）われわれは何をしているのか。あの人が多くのしるしを行っているというのに。
→祭司長たちとファリサイ派の人々は、多数の目撃者がいる中、イエスが多くの「しるし」を行っていることを認め（認めざるを得ない状況にあり）、何もできないままにいる自分たちに腹立ちや焦りを感じている。

48 このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の（地位や権威を誇示し、存在の場である）神殿も国民（聖書協会共同訳、回復訳：土地も国民、口語訳：土地も人民、NIV：our temple and our nation /NKJV：both our place and nation）も滅ぼしてしまうだろう。」

→ユダヤ人指導者（祭司長たちとファリサイ派）たちは、イエスがイエスに従う人たちをローマ帝国に対して蜂起させ、その結果、ローマ軍が神殿と国を破壊することを恐れた。また多くの人々がイエスとイエスの教えを信じ始めると、指導者たちの権威が失墜することにも非常におびえた。

→ユダヤ人指導者（祭司長たちとファリサイ派）たちは、国民よりも、自分たちにとって重要な神殿（土地）がなくなることを憂慮している。→優先順位：①神殿（土地）→保身、②国民

49 彼らの中の一人で、（ローマが任命した親ローマで）その年の大祭司であったカイアフアが（軽蔑の気持ちを含めて）言った。

「あなたがたは何も分かっていない。50 一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか。」

→カイアフア（＝カイアフアの子ヨセフ）は大祭司であったアンナスの婿で、ローマ総督の任命によって大祭司（在位：AD18～37年）となった。当時のユダヤではハスモン朝以来の伝統で大祭司が王と同じように政治的な影響力をもっていた。

→カイアフアの考え

1. イエスを放置すれば、ローマ軍によって国全体が滅ぼされる。
2. イエス（一人の人間）が死ねば、国全体は滅びない。

51 これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。52 国民のためばかりでなく、散らされている神の子たち（→異邦人の信者）を一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。

→（リビング・バイブル）イエスが全国民の代わりに死ぬことを、大祭司が預言したのです。カヤパは別の動機から、無意識のうちに、そのように言ったのです。これはイエスが、イスラエル人ばかりか、世界中に散らされているすべての神の子どもたちのためにも死んでくださるという預言でした。

→大祭司という職責のゆえに、神はカイアフア（カヤパ）に預言を与えている。

53 この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ。

54 それで、イエスはもはや公然とユダヤ人たちの間を歩くことはなく、そこを去り、荒れ野に近い地方のエフライムという町に行き、弟子たちとそこに滞在された。



出典(図): Bible History Online

55 さて、ユダヤ人の過越祭が近づいた。多くの人が身を清めるために、過越祭の前に地方からエルサレムへ上った。

→過越祭はイスラエル民族が遊牧民だった頃、初春の新年（ユダヤ・ヘブル暦のニサンニサンの月〈最初の月、正月、大麦の収穫の始まりを祝う月〉を指し、太陽暦〈グレゴリオ暦〉では3月から4月の時期にあたる。）に一家ごとに羊の犠牲を献げ、その血を家の戸口の柱と鴨居に塗る、そして家畜の安全と増殖（繁殖）を願う祈願祭だったが、後にイスラエル民族の出エジプトに関連付けられ、それを記念する行事となった（出エジプト 11：1～12：36）。

56 彼らはイエスを捜し、神殿の境内で互いに言った。

「どう思うか。あの人はこの祭りには来ないのだろうか。」

57 祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである。

【参考】 カイアフア

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 10 / 聖句等の総数 33250 (カイアフア)10個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: カイアフア]
S マタイによる福音書	26:3 そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、カイアフアという大祭司の屋敷に集まり、	
S マタイによる福音書	26:57 人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアフアのところに連れて行った。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。	
S ルカによる福音書	3:2 アンナスとカイアフアとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。	
S ヨハネによる福音書	11:49 彼らの中の一人で、その年の大祭司であったカイアフアが言った。「あなたがたは何も分かっていない。	
S ヨハネによる福音書	11:51 これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。	
S ヨハネによる福音書	18:13 まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアフアのしゅうとだったからである。	
S ヨハネによる福音書	18:14 一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアフアであった。	
S ヨハネによる福音書	18:24 アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアフアのもとに送った。	
S ヨハネによる福音書	18:28 人々は、イエスをカイアフアのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。	
S 使徒言行録	4:6 大祭司アンナスとカイアフアとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。	

【参考】 最高法院 サンヘドリン sanhedrin

ローマ帝国支配下のユダヤにおける最高裁判権を持った宗教的・政治的自治組織（ユダヤ議会）、最高律法教育機関でエルサレム神殿内に置かれた。

メンバーは、71人で構成（議長一世襲制の大祭司と副議長が各1人、議員69人、計71人）された。「最高法院」「長老会」などで新約聖書に登場する。→下記【参考】1、2参照

①モーセが神の命令によって召集した70人の長老に起源を持つとされる（民数記11:16、ユダヤ教のラビ伝承）。

→民数記11:16 主はモーセに言われた。「イスラエルの長老たちのうちから、あなたが、民の長老およびその役人として認めうる者を七十人集め、臨在の幕屋に連れて来てあなたの傍らに立たせなさい。

②権限等については、ギリシア語資料（新約聖書）とヘブライ語資料（タルムード伝承）のいずれに依拠するかによって説が異なるが、**①宗教問題を扱う部門**と**②政治問題を扱う部門**とに分れていたとする説が有力である。

③メンバーは、**①サドカイ派**（→【参考】3）を代表とするの**貴族祭司長**（祭司長は、神殿の中での祭儀、財政、警察を担当し、最高法院の中核であった）のグループ、**②ファリサイ派**（→【参考】4）を代表とする**律法学者のグループ**、**③長老**（一般人の代表者、経済的に余裕を持った年配の人で、祭司長と密接な関係を持ち、指導的立場にあった）のグループの三グループから構成されていた。

④会合は、安息日や祝祭日を除き、朝のいけにえを捧げる時（AM8時半頃？、AM9時：朝の祈り）から夕刻のいけにえを捧げる時（PM2時半頃？、PM3時：夕の祈り）に行われた。

→ユダヤでは、神殿ないし会堂での祈りが日に3度（AM9時、正午、PM3時）行われた（朝と夕の祈りは必須、正午の祈りは任意）。

⑤司法（裁判）権を行使し、刑の執行を行なうこともできた（イエスが裁判にかけられたころには、死刑宣告をする権限はローマによって剥奪されていた）。

⑥神殿祭儀の監督指導を行ない、祭司や裁判官の任命も行った。

⑦新月と閏（うるう）年の宣言、ユダヤの祝祭日を決定する権限も持っていた。

※AD70年の神殿崩壊後は各地を転々、200年頃からは、ローマ帝国の皇帝テオドシウス帝（在位：AD379～395）によって祭司政治が廃絶されるまで、ティベリアス（AD20年頃、ヘロデ大王の子ヘロデ・アンティパスにより、破壊された村の跡地に建設され、ガリラヤ地方の首都となった。アンティパスの後見人であったローマ皇帝、ティベリウスに因んでティベリアスと名付けられた。→ヨハネによる福音書6:1、23、21:1）におかれ、ローマ帝国内のユダヤ人の政治的、宗教的生活の中心となった。

【参考】 1. 四福音書にある「最高法院」「長老会」

マタイによる福音書	5:22 しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
マタイによる福音書	26:59 さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めた。
マルコによる福音書	14:55 祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。
マルコによる福音書	15:1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。
ルカによる福音書	22:66 夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法院に連れ出して、
ヨハネによる福音書	11:47 そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。」

【参考】2. 使徒言行録にある「最高法院」「長老会」

使徒言行録	5:21 これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。
使徒言行録	5:27 彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。
使徒言行録	5:41 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、
使徒言行録	6:12 また、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。
使徒言行録	6:15 最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた。
使徒言行録	22:5 このことについては、大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます。実は、この人たちからダマスコにいる同志にあてた手紙までもらい、その地にいる者たちを縛り上げ、エルサレムへ連行して処罰するために出かけて行ったのです。」
使徒言行録	22:30 翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。
使徒言行録	23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」
使徒言行録	23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。
使徒言行録	23:15 ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるといふ口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」
使徒言行録	23:20 若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるといふ口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。」
使徒言行録	23:28 そして、告発されている理由を知ろうとして、最高法院に連行しました。
使徒言行録	24:20 さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。

【参考】3. 富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して柔軟

サドカイ派は、その名を祭司の主流派であるツアドク（ザドク）に由来し（サムエル記下 20：25、列王記上 1：38～44）、神殿詣（神殿信仰）に重点を置き、そこで犠牲を献げることを教えた。裕福な上流社会のユダヤ人（サムエル記下 20：25、列王記上 1：39～45）－祭司、教養のある金持ち、そして貴族に属する人々でファリサイ派と対立した。彼らはモーセ五書（トーラー）をファリサイ派のような多くのこじつけの議論や問題に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、あまり人気がなく、大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力があり、非常に影響力があった。

【参考】4. 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのはファリサイ派で、現代のユダヤ教の諸派もほとんどがファリサイ派に由来している。ファリサイ派はハスモン朝^{※1}時代に形成され、死後の世界を信じ、律法を守ること、特に安息日や断食

(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書〈トーラー〉－創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記－を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビ rabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシム」＝「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した(ヨハネによる福音書9:22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった(ヨハネによる福音書3:1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ(マタイによる福音書26:1~5、マルコによる福音書14:1~2、ルカによる福音書22:1~6、ヨハネによる福音書11:45~57)。

エルサレム神殿の崩壊(AD70年)後はユダヤ教の主流派(神殿に拠っていたサドカイ派は消滅)となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていた。

※1: BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。

フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。